

北斗句会選句 (令和3年3月)

森田光彦

特選

NO. 1 7 中天の月は朧に竹生島

朧夜の波静かな琵琶湖の情景が目には浮かび、訪ねてみたい気がします。
リズムもよく素晴らしいです。

選

NO. 1 1 草餅や彼の日彼の野辺幼どち

草餅を手に友達と野山を駆け回った幼き日の思い出に
浸っている作者の姿が見えます。

NO. 2 1 紅梅や薨の波に香り乗せ

「薨の波に香り乗せ」に着目した措辞がすばらしい。

NO. 2 8 風立ちて関の声とも芽木の山

春一番でも吹いたのか、眠っていた山が目覚める様子が彷彿とする。
「風立ちて関の声とも」の措辞に勢いを感じます。

NO. 4 2 春きざす我を追ひ抜く女学生

老々の作者を追い抜いてゆく女学生に新しい時代・季節を感じている様が
よく分かります。「春きざす」の季語が生きています。

宮下ひかる

特撰

NO. 33 ごみ出して暫く仰ぐ春の月

家庭円満、夫婦仲良く、微笑ましい。そして、自然を愛し、
悠々自適の老後生活。100歳はともかく120歳まで。

選

NO. 16 心地よく散歩楽しむ木の芽晴れ

毎日の日課としての散歩は、心地よく見る目も微笑ましい。
その心境から来る木の芽を感じ取れる雰囲気素晴らしい。

NO. 19 靴音の暖かさ増す歩道橋

春めいて、靴音もまるやかになり暖かい。歩道橋を渡る
人たちの靴音もまるやか、それを意識する詠み人の心やさしさ。

NO. 21 紅梅や薨の波に香り乗せ

紅梅の香りと薨がともに意識されており、
その心根と思いやりが、微笑ましく温かい。見る目も嬉しい。

NO. 24 春草の萌え出す突破力凄し

枯れ枝に着々と萌え出す、芽生えが力強く、
その見取りも、春を感じ取っており、力強さを感じる。

田中資凡

特選

NO. 11 認知症まだ早すぎる桜餅

認知症と桜餅の取り合わせがユニーク。「まだ早すぎる」が、言いえて妙。春先の老いの一瞬を見事に捉えており偕味がある。

選

NO. 1 草餅や彼の日彼の野辺幼どち

彼の日彼の野辺の表現が巧み。幼き頃、兄弟姉妹等と野に遊んだ思い出が蘇る思いがする。草餅やの言葉にある種の力を感じる。

NO. 22 祭壇の友の遺影や鳥雲に

友の遺影に参り、ありし思いを深くしたのであろう。鳥雲にの措辞が、その思いを深くしている。

NO. 27 青天の凜々しき富士や梅真白

青天の富士と梅真白が見事にマッチしている。凜々しきの措辞がよい。

NO. 42 春きざす我を追ひ抜く女学生

春きざす代表格が真に女学生、我を追ひ抜く女学生に春の音づれを感じ喜びを覚えているのだ。

竹内雲泉

特選

NO. 12 殺生の目刺しの竹をそつと抜く

「そつと」に気が籠り良いと思います。私も殺生とまで気を配ってとは申しませんが、目刺の串を抜く時は、いつも気になります。

選

NO. 4 草餅や母の手さばき偲ばるる

母のことを懐かしく思っているのが気に入りました。近頃は草餅を自宅で作ることが少ない所為か、草餅の句は思い出の句が多いですね。

NO. 17 中天の月は臙に竹生島

古風な感じの句ですが絵を見るようで、また、句のリズムもすばらしい。丁度、選句の日の明け方のこと、西の空に春の満月(十六夜)を見ました。

NO. 29 弥陀仏に聞けよ聴けよと初音かな

中句が初音の音が「ケキョ、ケキョ」に似ていて、句のリズム感が良いと思います。

NO. 42 春きざす我を追ひ抜く女学生

女学生は、二三人で話をしながら自分を追い抜いていったのでしょうか。明るく朗らかな春らしい雰囲気句で気分爽快です。

大森康正

特選

NO. 32 うららかな一塊として膝の猫

猫の温もりが春の心地よさを助長。一塊の表現が修辞。

選

NO. 12 殺生の目刺しの竹をそつと抜く

殺生に対する、日頃からの心の優しさが表現できた。

NO. 19 靴音の暖かさ増す歩道橋

冬から春へ、音の感じの変化に同感。歩道橋の靴音に着目したのは発見。

NO. 21 紅梅や薨の波に香り乗せ

満開の紅梅の香りが、春風に漂う情景が窺える。オーバーな表現だがポエムあり。

NO. 42 春きざす我を追い抜く女学生

上五と下五の取り合わせが良い。明るく賑やかな女学生の様子が浮かんでくる。

山縣秀雄

特選

NO. 7 木の芽吹く前だけ見よう訃報欄

上五「木の芽」と下五「訃報欄」の対比が、生と死で絶妙でよい。中七が効いて いる。

選

NO. 12 殺生の目刺しの竹をそつと抜く

目刺しの竹をそつと抜く作者の優しい気持ちが良い。下五が効いている。

NO. 19 靴音の暖かさ増す歩道橋

春の気配が中七で表現されており、上五「靴の音」に春の気配を感じた感性が素晴らしい。

NO. 29 弥陀仏に聞けよ聴けよと初音かな

季語の意味を良く理解しており、中七のリフレインも素晴らしい。

NO. 38 草の餅老いのおやつにふたつ買ふ

中七で年配者の状況を良く表現しており、老夫婦に対する気配りが素晴らしい。

長池豆陽

特選

No. 2 2 祭壇の友の遺影や鳥雲に

“鳥雲に”の季語が効いている。遺影の友に対する深い思いが、北方に向かって雲の中に消えていく鳥の影に重なる。余情余韻が深い。

選

No. 8 幼き日家族で搗きし蓬餅

今は両親も亡く、兄弟も離れているが、かつては家族皆で蓬を摘み、力を合わせて搗いて草餅を作った。幼き日の満ち足りた日々が蘇る、共感。

No. 1 2 殺生の目刺しの竹をそっと抜く

いつも何気なく食べている目刺しだが、納得と反省。ただ、上五の殺生の表現がきつい、別の表現がないかなと思う。

No. 2 0 さきがけの河津桜や紅の濃し

河津桜は二月早々に咲き出す。濃いピンク色のやや大きめの花びらが、いかにも春が来たという感じになる。早春らしい郷愁の句。

No. 3 2 うららかの一塊として膝の猫

膝に乗る猫は、寒い時は相見互いの互助の仲。だが暖かくなると、ただの暖かい塊で惰性と慣れあいの仲、まるで熟年の夫婦のよう、諧味十分。

太田黒幸風

特選

NO、12 殺生の目刺しの竹をそっと抜く

魚の目に竹串を刺す残酷さを感じながらも、それを申し訳なさそうに食べようとする対極に諧味が感じられる句である。

選

NO、4 草餅や母の手さばき偲ぼるる

母の思い出の句、単純に納得のいく句。

NO、9 静かなる人ばかりなり花の山

今の世情か一、花は満開なのに、人はマスクをして静かな花見である。

NO、17 中天の月は臙に竹生島

月の単純な句であるが、景の解る語呂の良い句である。

NO、42 春きざす我を追ひ抜く女学生

最近歩いているとどんどん追い抜かれていくが、颯爽とした若い女学生に追い抜かれていくと、春の到来が特に強く感じられる。

吉岡誠山

特選

NO. 30 炊き立ての御飯の湯気や木の芽和え

中7に切字「や」を使用、句全体を弾んだリズムにして、
季語の「木の芽和え」が季節感あふれる句にしている。

選

NO. 13 草餅や渡し待つ間の緋毛氈

上5に切字「や」を入れ、季語「草餅」の連想力を盛り上げ、
中7以下のゆったりと緋毛氈に包って待つ情景が浮かぶ。

NO. 19 靴音の暖かさ増す歩道橋

上5中7で、音を暖かさに変える様子が自然に描かれ、何か
不思議の世界に迷い込んだ感じのする句となっている。

NO. 22 祭壇の友の遺影や鳥雲に

中7の「や」で現実世界から、鳥雲の空想の世界に入りこんでいく
様子が、良く表現されている。

NO. 34 白波の先に椿の伊豆七島

海を見ながら、この白波の先には梅の花咲く伊豆七島があるんだよ
との思いが素直にかつ簡潔に詠まれている。

深見十万

特選

27番の句 「青天の・・・」 冬の富士の「景の大きさ」と「小さな梅」の対
比が面白く、色合いも2句一章の形も良く決ま
っている。

選

1番の句 「草餅や・・・」 あの時の仲間はどうしてる？

17番の句 「中天の・・・」 まるで能舞台のよう。

22番の句 「祭壇の・・・」 友の死は悲しい。鳥の帰るのも。

29番の句 「弥陀仏・・・」 初音を仏と一緒に聞くなんて！

藤田紀潮

特選

NO. 12 殺生の目刺しの竹をそっと抜く

目刺しを作る作業は殺生の極致のような行為ではあるが、食前のそっと竹を抜く動作により、鯛というか弱き命を頂く感謝の念が込められる。

選

NO. 20 さきがけの河津桜や紅の濃し

河津桜の一句一章「さきがけの紅濃き河津桜かな」では如何ですか。

NO. 25 年長の園児輪となりしゃぼん玉

年長組の園児が輪になってシャボン玉遊びに夢中になっている様子が見える。

NO. 32 うららかの一塊となり膝の猫

春の日の、のどかな一景。膝の上で丸くなって安らいでいる猫を「うららかの一塊となり」とした表現が絶妙。

NO. 33 ごみ出して暫く仰ぐ春の月

日常のゴミ捨てという行為と天界の美（春の朧月）の対照。「仰ぐ」は不要に見えるが、この句では中7の、や切れ（暫し仰ぐや）で強調するのも一法か。

大崎石州

特選

NO. 26 穂の芽の料理尽くしや旅の宿

旅先での春を感じる句、リズムが良い。

選

NO. 4 草餅や母の手さばき偲ばるる

草餅で思い出すのは母の手さばき。
さぞかし美味い草餅だろうと思わせる。

NO. 16 心地よく散歩楽しむ木の芽晴れ

霽囲気が出ているけれど、上五中七がダブっている。
リズムが良い。情景が出ている。

NO. 24 春草の萌えだす突破力凄し

破調の句。突破力としたリアルな表現が面白い。
意外性がある。

NO. 32 うららかの一塊として膝の猫

「一塊」が面白い。
しかし、「として」が冗長。